九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

# [023] 中国文学論集表紙奥付等

https://hdl.handle.net/2324/9895

出版情報：中国文学論集. 23, 1994-12-25. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

# 編集後記

この『中国文学論集』第二十三号は、通常の学術論文のほかに、このほど逝去された目加田誠先生の追悼号として、いつも先生の身近におられて、その時々を先生と共に生きて来られた五名の方々に思い出深い追悼文を寄せていただいた。編集後記も、しばし先生の追憶に耽ることをお許し願いたい。

目加田誠先生は、明治三十七（一九〇四）年二月三日、福岡県久留米市に誕生された（本籍地は山口県岩国市）。従って本年一九九四年は、先生の御年九十歳の卒寿であった。今日既によく知られた先生の九十年間に亘った御生涯を強いて大別すれば、昭和四年東京帝国大学卒業までの二十五年間、昭和四年東方文化学院助手から九州大学教授を経て昭和四十九年早稲田大学退職に至る四十五年間、そして昭和四十九年から平成六年の今日に至る二十年間に三大別されるであろうか。中でも、先生が最も心血を注がれたのは、言うまでもなく九州大学時代三十四年間、早稲田大学時代七年間の教壇生活を中心として、孜孜として続けられた畢生の大事業たる中国文学研究である。その研究の概要については、筆者如き若輩者の到底能くなし得るところではない。九州大学文学部『文学研究』第六十五輯（目加田教授退官記念特輯、昭和四十三年）所載の「『西日本文化賞』への推薦文」に、簡潔要領を得た名文の紹介がなされているのを併せて参照いただければ幸いである。

先生の学問は、該博で深遠な知識、豊富な資料に裏付けられている事は勿論であるが、何よりもその文章の美しさ、感情の豊かさに特色があると思われる。『詩経』や『楚辞』を従来の固定観念にとらわれず、あくまで文学作品として把えた画時代的な訳注書を始めとして、先生の全ての著書・論文は、その根底に豊かな感情を秘めた美文調で貫かれている。先生の一連の著作を拝読した時に、いつも何か純文学の名作を読んだ後の様な清々しい読後感に打たれるのは、恐らくその豊かな感情に裏打ちされた美文の然らしめる所であろう。その美文調は、しかし研究論著ばかりではなく、先生の実生活の各方面にも貫かれていた。先生は何よりも美しいものを美しいものとして愛

されたのである。御自分が六朝の貴公子を彷彿させる美男子であったばかりではない。桜や牡丹、書や画、能や浄瑠璃、そして古き良き北平の思い出など、先生はおよそ美しいものを美しいままにこよなく愛された。戦前・戦中・戦後を挟んで、先生は公私にわたり筆舌に尽くせぬ辛酸を嘗められた由であるが、我々若輩者の前では先生はそんな事はおくびにも出さず、多くの知音諸氏が周知の如く、もっぱら美しいもののお話に熱中された。

九州大学で三十四年間、早稲田大学で七年間の教職を終えられた後の先生は、この追憶文の末尾にも引用する様に、ひたすら自分の美しいものを追求する理想の生活に入られた。やがて失明という苦難、そしてたびたび重大な発作に見舞われ、幾度となく生死の淵から生還されながら、先生のひたすら美しいものを追い求める心は竟に最期まで些かも変ることが無かった。最後の歌集『残燈』が人々に感銘を与えるのは、外的には齢九十歳の失明した中国文学の最高権威が初めて物した素人和歌集というインパクトもさることながら、内的には先生のこの美しいものを求めてやまない純な心が読者の琴線に触れた要素が大きいであろう。先生の晩年の二十年間は、中国文学を志す若い学徒への研究指導も勿論であるが、主には大野城市の御自宅にあって、身近に知り得た知己との新鮮な交流を何よりの楽しみとされ、自分の興趣のおもむくままに悠然と遊び、あたかも中国古代の仙人の境地に入られたが如くであった。

ここで筆者は、先生が三十四年間の心血を注いで鞏固な礎石を築かれた九州大学中国文学研究室に今日関わるものとして、些かの感懐を禁じ得ない。幸いに我が研究室は、目加田先生の畢生の御努力と、その後を継承された岡村繁先生の懸命の御奮闘によって、今日の地位を築き上げて来た。研究室の〝自己評価〟は困難な面もあるが、少なくとも我が研究室が日本の中国文学研究の一端を支える西日本の研究拠点であることは異論が無いであろう。そして、我が九大中文が学界において何がしかの存在基盤があるとすれば、それは偏に初代教授たる目加田先生の確かな御指導の賜物である。まこと古来の諺語に云う「飲水不忘掘井人」、今日の中文の蔵書を見ても、目加田先生の時代に購入して頂いた豊富で貴重な図書のお陰で我々がどれほど恩恵を蒙っているか、測り知れないものがある。我々は今日なお先生の遺産を直に継承しているのである。

ここに我々は新刊の『中国文学論集』第二十三号を、我々の日々年々の研究成果をまとめたものとして、つつし

んで先生の御霊前に献呈する。先生は果たして何とおっしゃって受取って下さるであろうか。早稲田大学退職後から数えても二十年間、筆者も何度か大野城市の御自宅でお話を伺う機会に恵まれたが、先生はその都度九大中文の現状を心配され、そしてその将来を案じられた。先生が確かな礎を築かれた九大中文研究室の今日に集う我々は、そのことを思えば、自らの非力を顧みて忸怩たるを禁じ得ない。ただ、確かに言えることは、この二十三号は既刊二十二冊の蓄積があって初めて刊行が可能であったし、その前身には『中国文芸座談会ノート』既刊十一冊があることである。目加田先生の時代から続く伝統的な中国文芸座談会は、一九九四年十一月の例会で以て既に一五三回を重ね、全国でも屈指の長命の研究会となっている。

今日の日本の大学をめぐる全国的な再編（リストラ）の大きなうねりの中で、わが中文研究室も近い将来何がしかの変貌を避けられぬかも知れない。しかし、例え組織や所属の名称がどう変ろうとも、大学で日夜孜孜として営まれる真理探究の研究活動は、古今東西にわたって不変であろうし、また変ってはならないものである。我々はそのことを胆に銘じつつ、些かでも目加田先生の畢生の御努力に報いる為に、微力ながら我々にやれる精一杯の研究活動を今後に誓うものである。

最後に、先生が七十歳致仕の時に、その後の余生の送り方を述懐された美文（『目加田誠博士古稀記念中国文学論集』所収）の一節を引用して、この拙い追悼文を終わることにする。二十年前の文章であるが、あたかも眼前の先生が語りかけられているが如き清新さと臨場感がある。（竹村則行記）

学問は私の道楽である。なぜなら学問でもしなければ、この世はあまりに侘びしく、寂寥に堪えぬではないか。七十になったら、もう世の中のつとめは許してもらって、ただ自分の思いどおりの生活をしよう、とかねて考えていた。さてそれで今後どうするか。それは残された月日と健康に任せよう。

懐しい想い出の九大の諸君、楽しい思いをさせてもらった早大の皆さん、どうぞ、それぞれに研究の道を励んでください。無器用な花園の園丁は、もうここで手を休めて、今後は美しい日の光や、風にただよう花の香りを楽しみながら、もう一度自分を見つめて、なお少ししのこした仕事を片づけながら気儘に生きてゆこうと思います。

編集後記